

目標志向性が学修行動に及ぼす影響の分析 —簿記のオンライン授業を対象にして—

手 嶋 竜 二
金 川 一 夫

〔要 旨〕

本研究の目的は、目標志向性を測定し学修行動との関連を明らかにすることである。どのような目標志向性をもつことが学修行動を促すのかを男女別に検討した。大学生108名を対象とし、アンケート調査を実施した。共分散構造分析により因子間の因果関係を検討した結果、全体データにおいて、マスタリー目標は達成欲求から大きな影響を受けていることが明らかとなった。マスタリー目標が学修行動に与える影響は大きいことも判明した。次に、学修行動はマスタリー目標と自己効力感から直接的に影響を受けていた。また、自己効力感は間接的にマスタリー目標を経由して学修行動に影響を与えていたことも明らかになった。そして、本研究ではパフォーマンス接近目標とパフォーマンス回避目標は学修行動に影響を与えていないことが判明した。男女別の検討において、パフォーマンス回避目標は影響を受ける要因が異なった。男性では達成欲求、女性では失敗恐怖から影響を受けていた。

1. はじめに

1.1 目的

大学生を意欲的に学業に向かわせるように動機づけるにはどのようにすればよいのだろうか。それは教育者にとって最大の関心事であり、解決すべき課題であろう。動機づけに関する理論の1つに達成目標理論があり、それは「人が達成状況に対してなぜ異なったアプローチをするのかについて、その背景にある信念パターンに着目して解明しようとする考え方」(鹿毛、2013、p. 54)である。この他にも動機づけの要因の1つに自己効力感¹があげられる。自己効力感は達成目標理論のマスタリー目標と正の関連が認められており、その後の学修行動における最も重要な予測要因であると考えられている。そこで、本研究

¹ 自己効力感 (self-efficacy) は、Bandura (1977) により提唱された概念である。それは将来自分がうまくやれるという期待もち、それをコントロールできる感覚である。

の目的は、達成動機や自己効力感がどのような目標志向性²をもたせ、どのように学修行動と関連するのかを検討することである。そして、どのような達成動機や目標志向性をもつことが学修行動を促すのかを明らかにする。

1.2 先行研究

1.2.1 達成目標理論の意義

人は物事にプラスの価値を見出すと積極的に行動し、マイナスの価値を見出すと消極的ないし回避的な行動を動機づけられる。価値を実現するために、より具体的な目標を設定し、それを達成しようと行動する。したがって、目標は動機づけを考えるとときに主要な概念となる（鹿毛、2013、p.44）。

1980年代に入り、目標に関して理論化された1つに達成目標理論(achievement goal theory)がある。達成目標理論は、認識された目標志向性により、その後の行動を予測するという考え方である。そこで使用された概念は当初統一されたものではなかったが、Ames & Archer (1988)により統合された。当該理論での目標志向性は、大別してマスタリー目標(mastery goal)とパフォーマンス目標(performance goal)の2つがある。マスタリー目標は、自分の能力を高めることが目標であり、努力することに大きな価値がある。パフォーマンス目標は、他人との比較で、他人より良い成績をとることが目標となる。できるだけ少ない努力で成功することに価値がある。

近年では、パフォーマンス目標を2つに分けて、マスタリー目標、パフォーマンス接近目標(performance-approach goal)、およびパフォーマンス回避目標(performance-avoidance goal)の3つの目標志向性で論じられている³。ここで接近というのは、成功への接近、回避というのは失敗への回避を意味している。つまり、パフォーマンス接近目標は成功接近的な目標を、パフォーマンス回避目標は失敗回避的な目標を意味している（村山、2003）。

これらの目標志向性が行動パターンに影響を与える。マスタリー目標が学修行動と正の関係に、パフォーマンス目標が学修行動と負の関係になることが見られる。しかし、マスタリー目標と比べて、パフォーマンス目標は研究によって結果が一致しないという問題も

² 目標志向性は、「主に快を求め、不快を避けること（正の目標に接近し、負の目標を回避すること）」である（上淵・大芦、2019、p.2）。

³ さらなる理論的な展開が行われている。例えば、Elliot & McGregor (2001)によりマスタリー目標が2つに分類され、マスタリー接近目標、マスタリー回避目標、パフォーマンス接近目標、およびパフォーマンス回避目標の合計4（2×2）つの目標志向性が主張された。

みられ、上述のパフォーマンス目標を接近－回避に分けるようになる経緯になった(上淵・大芦、2019)。

1.2.2 先行研究レビュー

海外において、目標達成理論は理論の精緻化やスポーツへの展開という方向に進んでいる。例えば、理論の精緻化について、Brockbankら(2020)は、2×2フレームワークを検討し、目標志向性の理論的な相違にもとづきモデルを提案した。Senkoら(2011)は、これまでの達成目標理論の改定、特にパフォーマンス目標の区別や目標の数、そして論者による強調点の相違といった批判について理論の新しい方向性を示している。スポーツへの展開について、Hogue(2020)は、スポーツのパフォーマンスという文脈で若者が成長するのを支援しようとするときに達成目標理論は機能する適切なフレームワークであることを示唆している。Isoard-Gauthier(2013)は、アスリートの燃え尽き症候群について、社会的、環境的、そして個人的な要因について検討し、目標志向性の相違により燃え尽き症候群に陥りやすいリスクの高低を明らかにした。

わが国においては、田中・山内(2000)は、接近－回避の枠組みにもとづいて目標志向性の概念化の妥当性を確認的因子分析により検討した。そこでは、共分散構造分析を使用して、パフォーマンス接近目標とパフォーマンス回避目標は他の変数と異なる関連を示した。田中・藤田(2004)は、3つの目標志向性と学修行動の関連を共分散構造分析により検討した。その結果、目標志向性の相違により授業評価の仕方や学修行動が異なることを明らかにしている。光浪(2010)は、達成動機や目標志向性が学修行動に及ぼす影響について、過去の認知と将来の期待の組み合わせによって設定された4つの認知的方略の違いに焦点を当て検討した。共分散構造分析によりマスター目標とパフォーマンス接近目標が学修行動に正の影響を与えていたが、パフォーマンス回避目標は負の影響を与えていたことが判明している。このように先行研究では達成動機、目標志向性、および学修行動との関連を共分散構造分析により明らかにすることが多くみられる。そこで本研究においても、達成動機、目標志向性、および学修行動を中心に、動機づけ要因の1つである自己効力感を含めた関連を検討する。

2. 研究方法

2.1 手続き

環太平洋大学経営学部（IPU）において、2020年度後期（9月～翌年1月）に実施された「簿記演習 [A]」の履修者を対象として効果測定を行った。授業は、半期制で1コマ90分の全15回（オンデマンド型授業）である。最終回に Google Forms を利用し、アンケート調査を実施した。

本調査では、108名 {男性54名 (50.0%)、女性54名 (50.0%)} を対象とした。収集されたデータは IBM[®]SPSS[®]Statistics ver. 26により統計処理が行われた。なお、アンケート調査を実施するにあたり、大学の研究倫理規定を遵守している。

2.2 質問項目

達成動機尺度については、Lang & Fries (2006) が開発した測定尺度を参考に使用した。目標志向性尺度については、Elliot & Church (1997) が開発した測定尺度を参考に使用した。学修行動尺度については、中谷 (1998) および石田・川村 (2008) を参考に作成した。簿記の自己効力感尺度については、松沼 (2004) を参考に作成した。なお、すべての質問項目について6件法で回答を求めた。

3. 結果

3.3 因子分析

6件法の質問項目に対して主因子法・Promax 回転による確認的因子分析を行った。

3.3.1 達成動機尺度

分析の結果、固有値の変化 (5.82、1.19、0.50、0.38、0.31、…) から2因子の構造が確認された。最終的な因子パターンと因子間相関、および質問項目の平均値と標準偏差を表1に示した。なお、回転前の2因子で9項目の全分散を説明する割合は77.9%であった。

第1因子は5項目で構成されており、「自分にどれくらいの能力があるかを発見することができる状況が好き」であったり、「自分の能力をテストすることができる課題に魅力を感じ」たりする項目が高い負荷量を示していたので、先行研究と同様に、これを達成欲求因子と呼ぶことにする。第2因子は4項目で構成され、「すぐに問題を解決できない場

表 1 達成動機尺度

項目	因子		M	SD
	I	II		
I 達成欲求 ($\alpha = .93$)				
1 自分にどれくらいの能力があるかを発見することができる状況が好きだ。	.98		4.34	1.25
8 自分の能力をテストすることができる課題に魅力を感じる。	.84		4.14	1.25
6 自分の能力を活かすことができる状況を楽しむ。	.80		4.27	1.28
5 自分の能力をテストすることができる状況に興味がある。	.80		4.14	1.32
3 解決可能な問題に直面したとき、すぐに問題解決にとりかかりたい気持ちになる。	.59		4.31	1.26
II 失敗恐怖 ($\alpha = .90$)				
7 すぐに問題を解決できない場合、私は不安を感じ始める。		.88	4.00	1.33
4 成功するという確信がもてない場合には、何をすることも不安になる。		.86	3.95	1.38
9 たとえ誰も見ていないとしても、新しい状況ではかなり不安を感じる。		.80	3.90	1.34
2 自分次第で物事の多くが決定してしまうとき、少し困難な状況で失敗するのが怖い。		.76	3.89	1.33
	因子相関行列	I II		
	I	.68		

出所：筆者作成。M = 平均値、SD = 標準偏差

合、私は不安を感じ始める」や「成功するという確信がもてない場合には、何をすることも不安になる」といった項目に関して高い負荷量を示していたので、これを失敗恐怖因子と呼ぶことにする。内部整合性を検討するために、各因子の Cronbach の α 係数を算出した。達成欲求因子 $\alpha = .93$ 、失敗恐怖因子 $\alpha = .90$ となり十分に高い値を得られた。

3.3.2 目標志向性尺度

分析の結果、固有値の変化 (9.19、1.96、1.08、0.86、0.67、…) から3因子の構造が確認された。最終的な因子パターンと因子間相関、および質問項目の平均値と標準偏差を表2に示した。なお、回転前の3因子で17項目の全分散を説明する割合は71.9%であった。

第1因子は9項目で構成されており、「私にとって、周りのみんなよりもよくできると思われることは重要」であったり、「家族や友達、ほかの人たちによくできると思われるように、良い成績を取りたい」と思っていたりする項目が高い負荷量を示していたので、先行研究と同様に、これをパフォーマンス接近目標因子と呼ぶことにする。第2因子は6項目で構成され、「授業の内容をできるだけしっかりとわかるようにすることは、私にとって大切なこと」であったり、「授業中、できるだけたくさんのことを勉強したい」と思っていたりする項目に関して高い負荷量を示していたので、これをマスタリー目標因子と呼ぶことにする。第3因子は2項目で構成され、「授業で悪い成績をとる可能性について心配してしまう」であったり、「『悪い成績をとってしまったらどうしよう』と考えることがよくある」と思っていたりする項目に関して高い負荷量を示していたので、これをパフォー

表2 目標志向性尺度

項目	因子			M	SD
	I	II	III		
I パフォーマンス接近目標 ($\alpha = .93$)					
13 私にとって、周りのみんなよりもよくできると思われることは重要である。	.88			3.69	1.45
16 家族や友達、ほかの人たちによくできると思われるように、良い成績を取りたいと思う。	.84			4.03	1.42
5 私は、ほかの人より良い成績をとることを目標にしている。	.79			3.74	1.35
14 先生に変な質問をして、私の頭が悪いと思われるのが嫌いだ。	.75			3.32	1.56
10 周りのみんなよりも良い成績をとろうと思うと、やる気が出る。	.75			4.06	1.35
11 私は、他の人よりも悪い成績をとらないようにしたいと思う。	.66			4.10	1.32
8 自分の能力が、他の人よりあるということを示そうと努力している。	.64			3.92	1.32
17 「成績がつけられなければいいのに」と思う。	.63			3.43	1.45
2 他の人より良い点をとることは、私にとって重要なことだ。	.54			3.98	1.41
II マスタリー目標 ($\alpha = .91$)					
4 授業の内容をできるだけしっかりとわかるようにすることは、私にとって大切なことだ。		.97		4.51	1.26
1 授業中、できるだけたくさんのことを勉強したいと思う。		.87		4.43	1.35
7 授業の内容について、もっと幅広い知識や、もっと深い知識を得たいと思う。		.83		4.39	1.21
15 私は、少し難しくても新しいことを勉強する方が好きだ。		.72		4.10	1.20
12 授業では、簡単な内容よりも、少し難しくても面白い内容をする方が好きだ。		.65		4.11	1.17
9 私は、授業で配布された資料を完全に理解したいと思う。		.61		4.19	1.29
III パフォーマンス回避目標 ($\alpha = .83$)					
6 私は、授業で悪い成績をとる可能性ついて心配してしまう。			.63	3.93	1.43
3 「悪い成績をとってしまったらどうしよう」と考えることがよくある。			.62	4.12	1.44
	因子相関行列				
	I	II	III		
		.63	.38		
			.46		

出所：筆者作成。M = 平均値、SD = 標準偏差

パフォーマンス回避目標因子と呼ぶことにする。内部整合性を検討するために、各因子の Cronbach の α 係数を算出した。パフォーマンス接近目標因子 $\alpha = .93$ 、マスタリー目標因子 $\alpha = .91$ 、およびパフォーマンス回避目標因子 $\alpha = .83$ となり十分に高い値を得られた。

3.3.3 学修行動尺度

分析の結果、初回で固有値の変化 (9.56、1.76、0.62、0.54、0.38、…) から1因子の構造が確認された。その際、十分な因子負荷量を示さなかった質問項目13と15が判明したので、それを除外し残りの13項目に対して再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行うこととした。その結果、最終的な因子パターン、および質問項目の平均値と標準偏差を表3に示した。なお、回転前の1因子で13項目の全分散を説明する割合は73.5%であった。

第1因子は13項目で構成されており、「わからない問題があるときには、教科書やノー

表3 学修行動尺度

項目	因子		
	I	M	SD
I 学修行動 ($\alpha = .97$)			
2 わからない問題があるときには、教科書やノートなどをすみずみまで読んで、分かるようにする。	.90	4.37	1.27
4 問題の意味がわかりにくい時は、その問題がわかるまでよく読む。	.90	4.34	1.34
11 自分がやりやすいように、勉強のやり方を工夫している。	.88	4.30	1.26
1 勉強するときに、ここまではやろうという目標や計画を立てる。	.86	4.07	1.29
5 勉強の時は、動画や教科書をよく見て理解しようとしている。	.86	4.43	1.32
10 授業の内容を理解しているかどうかを、自分で振り返る。	.86	4.16	1.25
6 難しいと思った問題でも、すぐにあきらめず、ねばり強く取り組む。	.85	4.33	1.38
14 授業で習って興味があることやわからなかったことは、あとで自分で調べたり、先生や友達に聞いたりする。	.85	4.18	1.25
12 授業で先生が大切だと言ったことは、教科書やノートなどに書き込んでいる。	.84	4.21	1.34
3 先生が動画で説明していることは、きちんとノートに書いている。	.82	4.12	1.31
7 課題やレポートが出されたときは、忘れずにきちんとしてくる。	.80	4.42	1.42
8 家に帰ってから、その日学修した内容を整理したり、見直したりする。	.77	3.93	1.26
9 教科書やノートの大切な部分には、下線を引いたり、しるしをつけたりしている。	.77	4.21	1.21
13 少しでも難しい、面白くないと思ったら、授業に出席するのをやめてしまう。(R)		3.00	1.65
15 授業を受けるのはめんどくさい。(R)		2.92	1.57

出所：筆者作成。 M = 平均値、 SD = 標準偏差、 R = 逆転質問項目

トなどをすみずみまで読んで、分かるように」したり、「問題の意味がわかりにくい時は、その問題がわかるまでよく読」んだりする項目が高い負荷量を示していたので、先行研究と同様に、これを学修行動因子と呼ぶことにする。内部整合性を検討するために、因子のCronbachの α 係数を算出した。学修行動因子は $\alpha = .97$ であり、十分に高い値を得られた。

3.3.4 自己効力感尺度

分析の結果、初回で固有値の変化 (6.19、0.64、0.31、0.24、0.21、…) から1因子の構造が確認された。その結果、最終的な因子パターン、および質問項目の平均値と標準偏差を表4に示した。なお、回転前の1因子で8項目の全分散を説明する割合は77.3%であった。

第1因子は8項目で構成されており、「簿記の授業で与えられた問題を正解することができる」や「簿記の学修内容についてたくさんを知っている」と思っている項目が高い負荷量を示していたので、先行研究と同様に、これを自己効力感因子と呼ぶことにする。内部整合性を検討するために、因子のCronbachの α 係数を算出した。自己効力感因子は、 $\alpha = .96$ であり、十分に高い値を得られた。

表4 自己効力感尺度

項目	因子		
	I	M	SD
I 自己効力感 ($\alpha = .96$)			
4 簿記の授業で与えられた問題を正解することができる。	.93	4.10	1.21
5 簿記の学修内容についてたくさんを知っていると思う。	.90	3.99	1.29
7 簿記の学修内容を学ぶことができると思う。	.89	4.19	1.26
8 簿記の勉強のやり方を知っていると思う。	.87	3.94	1.27
6 簿記の学力は優れていると思う。	.86	3.70	1.29
3 この授業でよい成績が取れると思う。	.86	4.04	1.27
2 この授業で説明されたことはわかる。	.85	4.19	1.31
1 簿記が得意である。	.73	3.44	1.32

出所：筆者作成。M = 平均値、SD = 標準偏差

3.4 平均の差の検定 (t 検定)

因子の男女間の比較を行うために、t 検定を実施し、表5に示した (df (自由度) = 106、*. $p < .05$ 、**. $p < .01$)。その結果、達成欲求 ($t = 2.80^{**}$)、失敗恐怖 ($t = 1.99^*$)、マスタリー目標 ($t = 2.58^*$)、および学修行動 ($t = 2.26^*$) について男性より女性の方が有意に高い得点を示していた。つまり、女性の方が自分の能力を伸ばすことに意欲的であり、学修行動も伴うこと考えられる。

表5 平均値、標準偏差、t 値

因子	男性 $n = 54$		女性 $n = 54$		t 値
	M	SD	M	SD	
達成欲求	3.95	1.09	4.53	1.08	2.80**
失敗恐怖	3.71	1.13	4.16	1.19	1.99*
マスタリー目標	4.04	1.05	4.54	0.98	2.58*
パフォーマンス接近目標	3.64	1.12	3.97	1.11	1.54
パフォーマンス回避目標	3.86	1.36	4.19	1.28	1.28
学修行動	4.00	1.09	4.47	1.09	2.26*
自己効力感	3.78	0.98	4.12	1.23	1.56

出所：筆者作成。 n = データの個数、M = 平均値、SD = 標準偏差、*. $p < .05$ 、**. $p < .01$

3.5 相関分析

全体データの相互相関について、抽出された7つの因子との相関を分析した (Pearson の相関係数 = r 、*. $p < .05$ 、**. $p < .01$)。分析の結果、すべての因子間において1%水準で有意になり正の関係となった。

男女別の分析を表6に示した。有意な相関関係が認められなかったのは、女性における

失敗恐怖と自己効力感 ($r=.22$)、パフォーマンス回避目標と自己効力感 ($r=.10$) の2つの関係であった。これら以外の関係は有意となり正の関係になった。つまり、女性において自己効力感が高いと失敗恐怖を感じる事が少ない(トレードオフの関係)と考えられ、その結果パフォーマンス回避目標を選択しないと考えられる。

表6 男女別の相互相関

	1	2	3	4	5	6
1. 達成欲求	—					
2. 失敗恐怖	.67**	—				
3. マスタリー目標	.64**	.65**	—			
4. パフォーマンス接近目標	.78**	.44**	.58**	—		
5. パフォーマンス回避目標	.62**	.67**	.67**	.53**	—	
6. 学修行動	.68**	.62**	.67**	.60**	.54**	—
7. 自己効力感	.63**	.51**	.61**	.69**	.34*	.80**
	.46**	.64**	.54**	.64**	.46**	.79**
	.71**	.48**	.84**	.49**	.54**	—
	.69**	.40**	.80**	.64**	.34*	—
	.73**	.56**	.79**	.49**	.46**	.80**
	.56**	.22	.55**	.56**	.10	.79**

出所：筆者作成 上段：男性、下段：女性、*. $p<.05$ 、**. $p<.01$

3.6 因子間の因果関係の検討

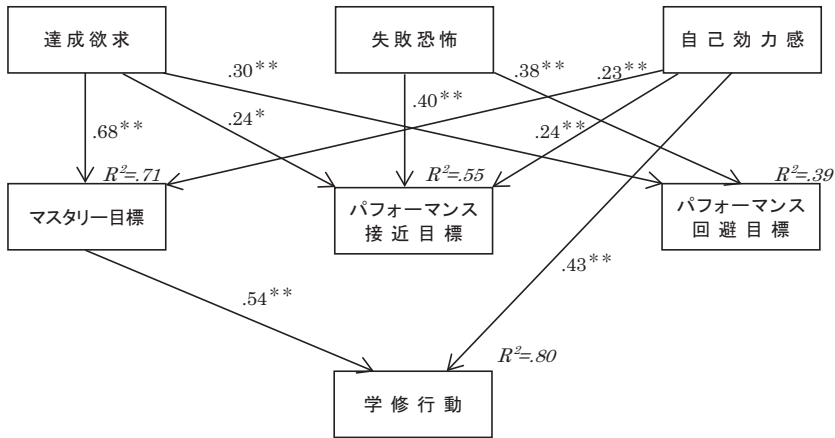
3.6.1 全体データの分析

達成動機や自己効力感が直接または目標志向性を經由して学修行動に影響するというモデルを検討するために、共分散構造分析を実施した。分析には Amos 6.0 を使用した。全データ ($n=108$) を対象として分析した結果、モデル全体の適合度 $GFI=.965$ 、 $AGFI=.861$ 、 $CFI=.987$ 、 $RMSEA=.099$ であった。このモデルを図1に示した。図には重決定係数 R^2 、標準化係数 β 、および有意になったパスを示している。

達成動機と自己効力感から目標志向性へのパスにおいて、マスタリー目標は達成欲求 ($\beta=.68^{**}$) から大きな影響を受けている。パフォーマンス接近目標は、失敗恐怖 ($\beta=.40^{**}$) から大きく、達成欲求 ($\beta=.24^*$) と自己効力感 ($\beta=.24^{**}$) から同程度の影響を受けている。パフォーマンス回避目標は、達成欲求 ($\beta=.30^{**}$) と失敗恐怖 ($\beta=.38^{**}$) から同程度の影響を受けている。

学修行動は、マスタリー目標 ($\beta=.54^{**}$) から影響を受けていた。また、学修行動は自己効力感からは直接的に影響を受けていたこと ($\beta=.43^{**}$) とマスタリー目標を經由して影響を受けていた。パフォーマンス接近目標とパフォーマンス回避目標から学修行動

図1 達成動機、目標志向性、学修行動および自己効力感の因果関係



出所：筆者作成。*. $p < .05$ 、**. $p < .01$

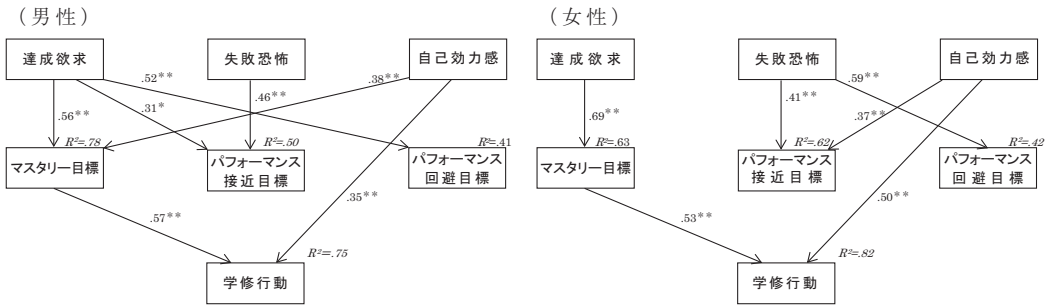
に影響を与えるパスは確認されなかった。先行研究 (Elliot & Church, 1997; 田中・山内, 2000; 光浪, 2010) によれば、マスター目標とパフォーマンス接近目標は学修行動を促進させ、パフォーマンス回避目標は学修行動を抑制させる。しかし、本研究において、マスター目標が学修行動を促進させることは確認されたが、パフォーマンス接近目標とパフォーマンス回避目標の影響は確認されなかった。

3.6.2 男女別データの分析

達成動機と自己効力感が学修行動に及ぼす影響に男女間でパス係数に差があるかを見るために検定を行った (多母集団同時分析)。その結果を図2に示した。モデル全体の適合度 $GFI = .936$ 、 $AGFI = .745$ 、 $CFI = .974$ 、 $RMSEA = .098$ であった。自己効力感からマスター目標、達成欲求からパフォーマンス回避目標の2つのパスにおいて有意差が認められた。

達成欲求は、男性ではパフォーマンス接近目標 ($\beta = .31^*$) とパフォーマンス回避目標 ($\beta = .52^{**}$) に影響を与えていたが、女性では影響を与えていなかった。失敗恐怖は、男性ではパフォーマンス接近目標 ($\beta = .46^{**}$) にのみ影響を与えているが、女性ではパフォーマンス接近目標 ($\beta = .41^{**}$) とパフォーマンス回避目標 ($\beta = .59^{**}$) に影響を与え、パフォーマンス回避目標に大きく影響を与えていた。自己効力感は、男性ではマスター目標 ($\beta = .38^{**}$) に、女性ではパフォーマンス接近目標 ($\beta = .37^{**}$) に影響を与えていた。学修行動は、男女ともにマスター目標と自己効力感から同程度の影響を受けていた。

図2 達成動機、目標志向性、学修行動および自己効力感の因果関係(男女別)



出所：筆者作成。 R^2 ：重決定係数と標準化係数を示した。 $^* .p < .05$, $^{**} .p < .01$

4. 考察

本研究の目的は、目標志向性を測定し学修行動との関連を明らかにすることであった。どのような目標志向性をもつことが学修行動を促すのかを男女別に検討した。 t 検定の結果、女性の方が自分の能力を伸ばすことに意欲的であり、学修行動も伴うことが判明した。相関分析の結果、有意な相関関係が認められなかったのは、女性における失敗恐怖と自己効力感、パフォーマンス回避目標と自己効力感の2つの関係であった。これら以外の関係は有意となり正の関係になった。つまり、女性において自己効力感が高いと失敗恐怖を感じる事が少ないと考えられ、その結果パフォーマンス回避目標を選択しないと考えられる。

因子間の因果関係の検討において、全体データにおいて、マスタリー目標は達成欲求から大きな影響を受けていることが明らかとなった。マスタリー目標が学修行動に与える影響は大きいことも判明した。これは先行研究 (Elliot & Church, 1997; 田中・山内, 2000; 光浪, 2010) と同様の結果を得られた。次に、学修行動はマスタリー目標と自己効力感から直接的に影響を受けていた。また、自己効力感は間接的にマスタリー目標を経由して学修行動に影響を与えていたことも明らかになった。そして、本研究においてパフォーマンス接近目標とパフォーマンス回避目標は学修行動に影響を与えなかった。先行研究によれば、パフォーマンス回避目標は学修行動に負の影響を与えるとあるが、本研究においては明らかにならなかった。しかし、先行研究の結果を考えるとパフォーマンス接近目標およびパフォーマンス回避目標は学修行動に影響を与えられるので、他の要因の影響を受けていないかを検討する必要がある。

男女別の検討において、男性では、パフォーマンス回避目標は、達成欲求からマスタリー

目標と同程度の影響を受けていた。達成欲求→パフォーマンス回避目標のパスにより、達成欲求があるけれども成功を回避する行動をとるかもしれない。つまり、学修したい気持ちはあるけれど、失敗することが怖いので、それだったら最初から行動はしないという気持ちは相反する行動を選択する可能性がある。女性では、失敗恐怖→パフォーマンス回避目標のパスにより、成功を回避する行動をとるかもしれない。これは過去の経験により学修性無力感に陥っている可能性も考えられる。学修性無力感から抜け出すためには自己効力感を高めるような学修方法が必要である。そのためにはスモールステップによる知識・技術修得が有効であると思われる（手嶋、2018；手嶋・金川、2019）。

学修行動は、男女ともにマスタリー目標と自己効力感から影響を受けていた。男女ともに自己効力感→パフォーマンス回避目標のパスは確認されなかった。自己効力感は学修行動を促進させることが判明した。女性では学修行動に直接的に影響を与えていたが、男性では、マスタリー目標を経由して、また直接的に学修行動に影響を与えていた。自己効力感、男性ではマスタリー目標に影響を与え、教科そのものに興味をもつのにに対し、女性では他人に負けたくないというパフォーマンス接近目標に影響を与えている。パフォーマンス接近目標はテストの点数等といった他人と比較することで達成でき、学修行動に結びつくことが考えられる目標志向性である。しかし、本研究では、パフォーマンス接近目標およびパフォーマンス回避目標から学修行動に有意なパスが認められなかったため、さらなる検討が必要である。

5. おわりに

本研究の成果は、達成欲求→マスタリー目標、および自己効力感が男女ともに学修行動を促進することを明らかにしたことである。教育的な示唆としては、まず学修行動に負の影響を与える因子を醸成しないことが重要となる。失敗の繰り返しにより期待をもてない状態にさせたり、成功を回避する行動を促進させたりしないことである。次に、興味を駆り立て、教科そのものを学修したいと思わせることである。そして、これらと同時に自己効力感をはぐくむことが重要となる。具体的には、小テスト等により能力を測定・フィードバックすること、そしてその能力を段階的にレベルアップすることができる教授法が求められる。

本研究の結果は、先行研究の一部を支持することができたが、直ちに一般化できるものではない。本研究においては学修行動にパフォーマンス接近目標とパフォーマンス回避目

標から影響を与える有意なパスが判明されなかった。しかし、中谷（2012）によれば、社会的目標や教室環境等が目標志向性に影響することもわかりつつある。したがって、今後の課題として、究明するモデルにこれらの新たな変数を取り入れた検討が必要になる。

参考文献

- Ames, C., & Archer, J. (1988), "Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes," *Journal of Educational Psychology*, (80)3, pp.260-267.
- Bandura, A. (1977), "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change," *Psychological Review*, (84)2, pp.191-215.
- Brockbank, Rebekah-Danielle, Smith, Daniel, Oliver, Emily (2020), "Dispositional goals and academic achievement: Refining the 2 x 2 achievement goal model," *Sport & Exercise Psychology Review*, (16)1, pp.20-37.
- Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996), "Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis," *Journal of Personality and Social Psychology*, (70)3, pp.461-475.
- Elliot, Andrew J. & Marcy A. Church (1997), "A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation," *Journal of Personality and Social Psychology*, (72)1, pp.218-232.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001), "A 2x2 achievement goal framework," *Journal of Personality and Social Psychology*, (80)3, pp.501-519.
- Hogue, H (2020), "Achievement goal theory-based psychological skills training session buffers youth athletes' psychophysiological responses to performance stress," *Psychology of Sport and Exercise*, (51), from https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S1469029220305434?dgcid=rss_sd_all.
- 石田靖彦・川村祥世（2008）「クラスの目標構造が生徒の学習行動に及ぼす影響－生徒のコンピテンスの違いに着目して－」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』（11）、pp. 255-261。
- Isoard-Gauthier, S., Guillet-Descas, E., & Duda, J. L. (2013). "How to achieve in elite training centers without burning out? An achievement goal theory perspective." *Psychology of Sport & Exercise*, 14(1), 72-83.
- 鹿毛雅治（2013）『学習意欲の理論－動機づけの教育心理学－』金子書房。
- Lang, J.W.B. & Stefan Fries (2006), "A Revised 10-Item Version of the Achievement Motives Scale," *European Journal of Psychological Assessment*, (22), pp.216-224.
- 松沼光泰（2004）「テスト不安、自己効力感、自己調整学習及びテストパフォーマンスの関連性－小学校4年生と算数のテストを対象として－」『教育心理学研究』（52）4、pp. 426-436。
- 光浪陸美（2010）「達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響－認知的方略の違いに着目して－」『教育心理学研究』58（3）、pp. 348-360。
- 村山航（2003）「達成目標理論の変遷と展望－『緩い統合』という視座からのアプローチ－」『心理学評論』46（4）、pp. 564-583。
- 中谷素之（1998）「教室における児童の社会的責任目標と学習行動、学業達成の関連」『教育心理学研究』（46）3、pp. 291-299。
- 中谷素之（2012）「何を指して学ぶか」（鹿毛雅治編（2012）『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版）。
- Senko, C., Hulleman, C. S., & Harackiewicz, J. M. (2011). "Achievement goal theory at the crossroads: Old controversies, current challenges, and new directions." *Educational Psychologist*, 46(1), 26-47.
- 田中あゆみ・山内弘継（2000）「教室における達成動機、目標志向、内発的興味、学業成績の因果モデルの検討」『心理学研究』（71）4、pp. 317-324。

- 田中あゆみ・藤田哲也（2004）「大学生の達成目標と授業評価，学業遂行の関連」『日本教育工学雑誌』（27）4、pp. 397-403。
- 手嶋竜二（2018）「学習性無力感理論を援用した簿記教育の提案」『環太平洋大学研究紀要』（13）、pp. 61-71。
- 手嶋竜二・金川一夫（2019）「自己効力感を高める簿記教育の提案：環太平洋大学における『簿記演習』の取り組みと実証研究」『会計教育研究』（7）、pp. 49-56。
- 上淵寿・大芦治編（2019）『新・動機づけ研究の最前線』北大路書房。